

自然保護の窓

森林の保護と紙の節約

自然保護活動といっても、すべてが労力や時間をとることばかりではない。ごく身近にできることはたくさんあるはずである。たとえば、紙の節約である。コピー機器が普及してから、私たちは紙をひじょうに無駄使いするようになった。研究者は、おもしろそうだからといって、結局は読みもしない論文をやたらにコピーする。事務官は、回覧板で十分なのに、会議の連絡であろうと、停電のおしらせだろうと、なんでもかでも教官1人ずつにコピーを配る。

コンピューターの使い方も問題だ。あまり意味のないシミュレーションそして、5 cmもの幅になる紙束を使い、入れた数値が適当でなかったといっただけを繰り返す。

霊長研の研究会などで苦々しく思うのは、無料だからといって（もちろん主催の研究機関が支払うことになるわけだが）、参加者の1人1人に10枚も20枚もコピーを作って配る所外の研究者のいることだ。参加者が50人いれば、500-1000枚が40分くらいの発表に消費されてしまう。1枚の紙にできるだけ多くの図表を入れるように工夫する人もいるがまれである。こうして配布された紙をもう一度読み直す人はほとんどいないだろう。発表はできる限り、スライドを使うべきである。これなら別の機会にも使えて発表者にとっても得である。

多くの人々は、用無しになったコピーの山に悩まされているだろう。私は捨てないで、原稿の下書きや計算、メモなどに使っているが、とても使い切れない。数年前からは友人、同僚のレター・ペーパーとしても使うようになった。同僚の中には意を察して、古紙で返事をしてくる人もいるし、京大の高崎浩幸氏は、私よりも前からそのようにしていたらしい。たまには、多量の紙束を家にもちかえて、2人の子供の計算用紙に使わせている。しかし、家には家で、無用の印刷物が届くので、需要はあまりなく、紙をもちかえるのは数か

月に一度くらいである。

古紙の値段が安くなって、古紙回収業者がなくなっただけは大問題である。タダでいいから引きとってもらい再生されるのを望んでいるが、タダで引きとってもらっても古紙再生は赤字になるとかで、業者はほとんど転業してしまっただけで、円高になって紙を輸入する方が古紙を再生するより安上がりだということである。政府は、再生紙を生産している企業や、再生紙を使う企業に、税制上の優遇措置をとるべきであろう。

紙となるパルプの原料の大部分は北米やソ連、ヨーロッパの軟材であり、熱帯の硬材の多くは、建材や家具に多く使われている。しかし、硬材をパルプとして使う技術が開発されてから、硬材はパルプ資源として注目され利用されはじめた。しかも紙の需要がますます増大するとともに、北方温帯の軟材の値段があがり、熱帯森林の硬材が将来紙の材料として最も重要な地位を占めると予測されている。すなわち、私たちは紙を無駄使いすることによっても、熱帯森林とそこに住む霊長類や他の動物を絶滅の淵に追いやりつつあるのである。

さて、ゲッチンゲンでの国際霊長類学会の大会で、Jonathan Kingdon氏が“Masked monkeys”というタイトルのBBC製作の映画を公開した。それは、アフリカ熱帯林のグエノン属の多様な顔面や尻の色彩パターン、ジェスチャー、警戒音、棲息場所などを描写し、それらが種分化に果たした役割や、グエノンの系統関係と進化を解説したきわめて興味ある内容であった。そして驚くべきことは、最近の20年間にグエノンの2つの新種と2つの新亜種が発見されたという事実である。20世紀後半になって哺乳類の新種が発見されるなどということは、ほとんどの人が期待していなかったであろう。

新種のうちの1つは、琉球大学の加納隆至氏が発見した*Cercopithecus salongo*である。かつて加納氏からこのことを聞いたとき、私は例外的な事件と思っていたがそうではなかったのである。そして、Kingdon氏によると、このように今頃新種のサルが記録されるのは必ずしも喜ぶべきことではないのである。なぜなら、これはついにザイ

ール森林が活発な開発、伐採の対象になり、それが最奥地におよんで旅行者が比較的容易に未知の森林に接触できるようになったことを示すからである。

このままでは、素晴らしい進化の物語の舞台と主演は、永遠に滅びてしまう。この森林を伐採しているのは、ドイツとベルギーであり、その木材を大量に輸入しているのは、ヨーロッパと、そしてまたもや日本なのである。フィリピンの森林を壊滅させ、ボルネオ、スマトラを食いあらし、そして遥かなるザイールの森まで私たちは破壊しつつあるのだ。

東南アジアで長くフィールドワークをした欧米の霊長類学者が日本嫌いになる傾向のあるのを私はもう10年以上も前から気づいている。なぜかという、彼らのフィールド、あるいはその附近の森林が破壊されつつある直接的・間接的原因が日本人であることを彼らは知っているからである。このままでは、アフリカやアマゾンのフィールドワーカーもいずれそうなるであろう。こうして、仲間であるフィールドワーカーさえも、反日的になっていく恐れがある。

根本的な解決には政治を動かさなければならぬ

## 編集長より

1. 研究を推進するために資源を確保し、良好な状態に保たねばならないのは実験室における研究でも野外の研究でも変わりありません。霊長類の生息環境を守り、霊長類の生息個体群を守るために乱獲を阻止することは、さしあたり実験用動物の供給を減らすことになるかもしれません。しかし、最終的には実験用も含めた資源の維持・確保につながることであり、霊長類学のすべての分野にとって大事なことだと考えます。一方で、自然資源をしっかりと確保しながら、他方で、実験研究用の繁殖供給体制を確立してゆくことが急務です。

そのために多くの議論が交わされ、積極的行動の起される必要があります。会員各位の積極的な参加を期待しています。

いだろうし、IPSその他の団体との協調活動によって効果をあげられる問題もあろう。しかし私たちはできることから始めよう。まったくさきやかであり、すでに多くの人が実行していることだとは思いますが、以上をまとめて次のような提案を記したい。もちろん、私自身の自戒のためでもある。今後、いろいろな提案の出ることを期待している。

1. 不急の文献などは、コピーを取らない。
2. コピーをとるときは、可能な限り両面コピーを取る。各研究機関は、両面コピーの値段を、片面コピーより割安にするよう措置をとる。
3. 研究発表には可能な限り、スライドを用いる。
4. 片面の白い不要の紙は、レター・ペーパーなどに用いる。(このような紙を使った送信者のことを、「失礼な奴」といって怒らない！)
5. 回覧板を多用する。
6. 紙のリサイクルを奨励するような税制上の優遇措置をとるよう、政府に働きかける。

(東京大・理 西田利貞)

2. 第2回総会で基本デザインの承認されました日本霊長類学会のシンボルマークが完成しました。右下をごらん下さい。これから、しばしば皆さんの目にとまるところに使ってゆきたいと考えています。

3. 3篇の意欲的な投稿を得て、本号には「主張」欄を設けました。この欄を継続するかどうかわかりませんが、既製のカテゴリーからはみ出るような記事も、生産的なものであればどしどし採択してゆこうとする編集理事会の意図です。

